

「レクリエーション」に対するイメージの研究
 —とくに大学生の事例比較を中心に—

高橋 伸 川 向 妙 子
 (国際基督教大学) (東海大学)

イメージ レクリエーション指導 若者

7割が18歳である事から、現役で入学してきているものといえる。

I. 研究の目的

近年、若者の意識は大きく変化してきているといわれる。いわゆる「新人類」なる造語も生まれるにいたり、多様化とともに、従来までの人並み志向の常識を越えた感覚で生活を律しているといわれている。¹⁾ それぞれが直感的に感じた感覚を重視し、それによるライフスタイルの形成がみられるようになった。一方、社会全般についても、企業にみられるイメージアップを中心としたCI運動(Corporate Identity)、商品のイメージづくりなど、現代の若者に焦点を合せたマーケティングが展開されている。

このようなことは、個人の抱いたイメージが、その人の行動と極めて密接な関係を有していること、および主観的なイメージが、その人の行動や活動に大きな影響を与えていることを意味している。そして、この傾向は今後ますます強くなることが推測される。

レクリエーションに関しても同様なことが言えよう。すなわち、レクリエーションに関する概念規定が多くの学者によってなされているが、²⁾それが一般人のレクリエーション行動と必ずしも一致するとは思われない。むしろ、直感的に抱くイメージに左右されると思われる。従来まで、レクリエーションに対するイメージを的確に把握する研究はあまりみられなかった。その意図のもとになされたものには、高橋が実施した事例が見られる。³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾

本研究は、同じ大学における研究事例をとりあげることができたので、高橋の追跡研究という意味を根底におき、現代の若者のレクリエーションに対するイメージの実態をとらえ、あわせて約20年前のイメージと比較検討しようとするものである。

したがって本研究のねらいは次の通りである。

- (1) 1986年度入学生のリクリエーションに対するイメージの一般傾向の把握。
- (2) 1968年度入学生との比較。

II. 研究の対象

1986年度、国際基督教大学の新生、男女387名、および1968年度238名の新生を本研究の対象とした。その内容は表1のとうりである。

1986年度入学の学生については、表2に年齢構成を示した。女子が6割と多い。年齢構成の特徴を見ると、男子において19歳以上の者が多く、彼等を受験浪人の経験者とすれば、約6割がこれに該当する。女子は反対に約

表1 対象者数

性別	年度	'68(%)	'86(%)
男	子	125(52.5)	146(37.7)
女	子	113(47.5)	241(62.3)
合	計	238	387

表2 '86年度新入生年齢構成

年齢	性別	男子(%)	女子(%)	合計(%)
18 歳		53(36.3)	116(68.9)	219(56.6)
19 歳		70(48.0)	64(26.6)	134(34.6)
20 歳		17(11.6)	9(3.7)	26(6.7)
21 歳		5(3.4)	2(0.8)	7(1.8)
22歳以上		1(0.7)	0	1(0.3)
計		146	241	387

III. 研究の方法と内容

1. 実施方法

'86年についても'68年と同様「自由連想法」⁷⁾⁸⁾により、イメージの測定を行った。

- 1) 刺激語 : 「レクリエーション」
 - 2) 時間 : 2分間
 - 3) 回答方法 : 用紙記入法
 - 4) 制限 : 反応語を名詞、形容詞のみに指定した。
- 両年度とも、本学入学後4月第2週目において、直ちに回答用紙を配布し、口答にて指示を与えた。

過去の経験と深く関わり、複雑でしかも本人の「構え」によって左右されるイメージを「自由連想法」により、単に分析、比較することには難があると言われていたが⁹⁾、その事柄の特徴を端的に表すという利点、及び'68年の調査と比較する目的からこの方法を実施した。

2. 分析の内容

(1)'86年度入学生における反応語の分析。

高橋の行った5項目の分類¹⁰⁾を用い、第1反応語、及び第3反応語まで、をまとめ検討した。

<5項目の分類>

- 感情反応→ 楽しみ、愉快、明るいなどの反応語としてあらわれたもの。
 叙述反応→ 休養、健康、遊びなど、説明的反応語を表したもの。

種目反応→ キャンプ、卓球など活動の種目をあげたもの。
 共在反応→ 山、海、椅子など活動と共にあるもの。
 印象反応→ 笑い、輪、和など活動に伴う印象反応語として上げたもの。

(2) イメージの一般傾向

再構成したイメージは、元のイメージに近いものが表わされるという観点から¹¹⁾、前述の5分類をもとに、反応語上位5種から一般傾向を見た。

(3) '86年との比較

反応語の分類とイメージの一般傾向による各年度の比較をすることにより、その関連性を明らかにし、'86年の特徴を明らかにする。

IV. 結果と考察

1. '86年の反応語傾向分析

'86年の第1反応語、第3反応語までに分けて検討した。

端的なイメージをとらえるには「第1反応語」を見ることであるが、詳しく全体をみるために「第3反応語まで」の傾向もまとめた。

表3、表4はそれぞれ「第1反応語」、「第3反応語まで」をまとめたものである。

表3 第1反応語における傾向

分類	'86年入学生	
	男子(%)	女子(%)
感情反応	21(14.2)	39(16.2)
叙述反応	48(32.4)	63(26.1)
種目反応	48(32.4)	97(40.3)
共在反応	20(13.5)	28(11.6)
印象反応	9(6.1)	14(5.8)
その他	2(1.4)	0
計	148	241

表4 第3反応語までの傾向

分類	'86年度入学生	
	男子(%)	女子(%)
感情反応	46(10.6)	90(12.8)
叙述反応	105(24.1)	118(16.7)
種目反応	152(34.9)	299(42.5)
共在反応	70(16.1)	117(16.6)
印象反応	55(12.6)	80(11.4)
その他	7(1.7)	0
計	435	704

第1反応語については、男女共、種目反応、叙述反応、感情反応が約8割を占めている。特に、スポーツ、ゲー

ム等の種目反応が多く見られる。

男女別の傾向としては、男子が種目反応と叙述反応で全体の6割以上を占め、女子では種目反応のみで4割以上を越えている。男女共、個々の活動の場に対するイメージが主であることは、種目の選択が指導上の重要な要素であることが確認される。また、男性に叙述反応が多いことから、知的なイメージが多いことを物語っているといえよう。

第3反応語までを見ると、男女共、1位種目反応、2位叙述反応、3位共在反応であり、イメージの同一化が見られる。価値観の多様化の時代において、同一化傾向を示していることは興味深い。

2. イメージの一般的傾向

反応語の上位5種までを表したものが表5、表6である。

表5 第1反応語のイメージ(上位5種)

順位	'86			
	男子		女子	
		人数		人数
1位	遊び	26	遊び	30
2位	楽しい	14	楽しい	28
3位	キャンプ	5	ゲーム	17
4位	フルーツバスケット	5	娯楽	8
5位	ハンカチ落とし	5	遠足	8

表6 第3反応語までのイメージ(上位5種)

順位	'86			
	男子		女子	
		人数		人数
1位	楽しい	31	楽しい	55
2位	遊び	31	遊び	48
3位	ゲーム	14	ゲーム	43
4位	息抜き	12	キャンプ	22
5位	キャンプ	10	フォークダンス	17
	フルーツバスケット	10		

第1反応語について多少のバラつきが見られるものの、第3反応語まででは、ほぼ同様な傾向を示している。

男女共、「遊び」「楽しい」が常に上位に位置し、種目がそれに続く。

女子に「娯楽」、男子には「息抜き」と叙述反応が入っていることは、前述の反応語の分類の傾向と考え合せで見ると、注目したい点である。

表5、表6をもとに一般的イメージを再構成してみると次のようになる。

<第1反応語による一般的イメージ>

男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、フルーツバスケットやハンカチ

落しをする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊び、または娯楽であり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

＜第3反応語までによる一般的イメージ＞

男子→ レクリエーションとは遊びで、キャンプに出かけたり、ゲームやフルーツバスケットなどを、息抜きのためにする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

3. 各年度の傾向比較

(1) 反応語による比較検討

'68年、'86年のそれぞれ5分類した反応語の割合について第1反応語、第3反応語まで(表7)について比較検討を行った。

表7 反応語の傾向比較

分類	年度 性別 項目	'68*		'86	
		男子%	女子%	男子%	女子%
第1 反応語	感情反応	(2)30.4	(1)47.8	(3)16.2	(3)16.2
	叙述反応	(3)16.0	(3)7.8	(1)32.4	(2)26.1
	種目反応	(1)32.8	(2)32.1	(1)32.4	(1)40.3
	共在反応	13.6	(3)7.8	13.5	11.6
	印象反応	4.8	2.6	6.1	5.8
	その他	2.4	1.9	1.4	0
第3 反応語	感情反応	(2)22.3	(2)28.2	10.6	12.8
	叙述反応	13.4	(3)15.9	(2)24.1	(2)16.7
	種目反応	(1)33.1	(1)32.1	(1)34.9	(1)42.5
	共在反応	(3)18.6	12.3	(3)16.1	(3)16.6
	印象反応	7.3	9.7	12.6	11.4
	その他	5.3	1.8	1.7	0

* '68年高橋による¹²⁾()内は各項の順位

第1反応語については、両者共、感情反応、叙述反応、種目反応がほぼ8割を占めている。

'68年に比べ、'86年では男女共、感情反応が減少し、叙述反応が高くなっている。特に女子にこの傾向が強く表われている。

指導者の指導内容によって左右されると考えられる感情反応が減少し、客観的な評価と見なされる叙述反応が増加してきたことは、イメージが認識され、定着してきたことを示していると言えるであろう。

第3反応語までについては、'68年と比べても種目反応の第1位は変わっていない。その他については、感情反応が減少し、叙述反応、共在反応が'86年の男子を除き増加し、1位種目反応、2位叙述反応、3位共在反応

と男女の差はなく、イメージの傾向の固定化が確認できる。

また、加えて活動と共にある共在反応の増加はレクリエーション活動に参加する機会が20年前に比べ、増加していることを意味するものと思われる。今後、指導については、なお一層の検討、充実を図っていかねばならない。

(2) イメージの一般傾向の比較検討

'68年、'86年のそれぞれの反応語を上位5種(表8、9)で再構成したものを以下に述べる。

＜第1反応語による一般的イメージ＞

'68 男子→ レクリエーションとは遊びであり、フォークダンスなどのダンスをしたり山へハイキングに出かける楽しいものだ。

女子→ レクリエーションは余暇においてスポーツやキャンプであるいは芝生でフォークダンスをすることで、楽しくて好きだ。

'86 男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、フルーツバスケットやハンカチ落しをする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊び、または娯楽であり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

＜第3反応語までによる一般的イメージ＞

'68 男子→ レクリエーションとはハイキングやフォークダンスなどのダンスを女性と一緒にする楽しいものである。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、余暇においてハイキング、フォークダンス、ゲームなどを行う楽しいものだ。

'86 男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたりフルーツバスケットなどを、息抜きのためにする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

表8 反応語のイメージ比較

分類	年度 性別 順位	'68**				'86				
		男子		女子		男子		女子		
		第1反応語	1	楽しい 24	楽しい 44	遊び 26	遊び 30	2	遊び 8	キャンプ 6
	3	ハイキング 7	フォークダンス 6	キャンプ 5	ゲーム 17	4	フォークダンス 5	スポーツ 4	フルーツバスケット 5	娯楽 8
	5	ダンス 5	芝生 4	ハンカチ落とし 5	遠足 8		山 5	好き 4		
			余暇 4							
第3反応語	1	楽しい 46	楽しい 60	楽しい 31	楽しい 55	2	ハイキング 27	ハイキング 21	遊び 31	遊び 48
	3	フォークダンス 14	フォークダンス 12	ゲーム 14	ゲーム 43	4	女性 14	ゲーム 12	息抜き 12	キャンプ 22
	5	ダンス 12	余暇 10	キャンプ 10	フォークダンス 17			遊び 10	フルーツバスケット 10	

** '68年高橋による¹³⁾

第1、第3反応語まで両者において、種目の違いはあっても、'68年に比べ'86年では男女共「レクリエーションは遊びであり、楽しいものだ」という概念がはっきり出ている。

第1反応語では、'86年では「楽しい」「遊び」を除くものは種目反応が中心であるが、両年ともはっきりした傾向は見いだせない。

第3反応語まででは3位、および4、5位まで男女同様の傾向が見られ、これを総合すると、'68年では「レクリエーションはハイキングに出かけたり、フォークダンスをしたりする楽しいものだ」となり、'86年には「レクリエーションは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームをしたりする楽しいものだ」となる。種目が変わってきたことに加え、「遊び」という説明を加え、より詳しいイメージとなってきた。

18年の間にイメージの傾向が固定化し、より明確なイメージが確立してきていることが伺える。

V. まとめ

以上、大学生のレクリエーションに対するイメージを1986年度学生、および1968年度学生との比較について考察してきた。これらを通してまとめられることは次の通りである。

1. 1986年度学生の特徴

1) 男女差がイメージにおいて見られない。

1986年度学生のイメージは、男女共ほぼ同様の傾向を示す。すなわち男女の平均化がイメージの上にも表れているといえよう。

2) イメージの固定化が見られる

イメージにおいて種目反応が多いことは当然である。しかし「楽しさ」「遊び」という叙述反応がみられることは、現代の情報量と関わりがあるのではないかとおもわれる。

2. 1986年度および1968年度学生の比較

1) 1986年度学生のほうが叙述反応が多くみられる。

これは、現代の感覚重視から見ると、予想外のことと言えるが、別な視点から見ると、それだけレクリエーションへの理解が深くなってきたとも考えられる。

2) いずれも種目反応が多い

レクリエーションと聞くと、実際に出てくるのは過去あるいは現在において経験し印象に残っている活動が多くなる。このことは当然とも言えるが、それだけ活動種目の重要性を示しているとも言えよう。

3) 1968年度男子学生では、「ダンス系」「女性」などのイメージが強い。しかし1986年度男子学生は「遊び」「息抜き」など、理由づけがなされている。

4) 女子学生においてはイメージの上に年度差があまりみられない。

これらのことから、今後レクリエーション指導上考えなければならないことの一つに「男女差がなくなってきた」ことがあげられよう。現代社会の風潮—モノセックス、中性化、男女雇用機会均等法、女性管理職の増加などが、レクリエーションの分野においても大きく影響を受けざるをえない。また、現代の若者は自己の感覚を重視していると言われるものの、レクリエーションのイ

メージにおいては、あまりその傾向は見られない。これは社会生活を営む上で、他人と関わる状況においては、他人並（人並み）の心も依然として残っているとも言われていることと関連があるのではないだろうか¹⁴⁾。

今回は、行動と密接に関係していると言われているイメージを端的にまとめて指導のポイントを探ろうとしたが、今後の課題として、イメージの多様化、そしてライフスタイルの多様化が進んでいる現状の中で、レクリエーションのイメージが固定化してきていることの評価をふまえ、社会の変化、個人の意識といった幅広い洞察を怠ることなく指導の内容、方法を考えてゆく必要があるであろう。

〔引用文献〕

- (1) 博報堂生活総合研究所 分衆の時代
日本経済新聞社 1985. 1 pp 78~80
- (2) 江橋慎四郎他 レクリエーション概論 現代レクリエーション講座 1 ベースボールマガジン社
1974 pp 34~60
- (3) 鮑戸 弘 イメージの心理学 潮出版
1970. 10 pp78~80
- (4) 高橋 和敏 レクリエーションに関するイメージの研究（第1報） 第4回レクリエーション研究会発表抄録 1968
- (5) 高橋 和敏 レクリエーションに対するイメージの分析 レクリエーション研究 1972. 7
- (6) 吉田他 消費行動の調査技法 丸善KK
1969. 7 pp 45~50
- (7) 吉田他 前掲(5) pp 66~69
- (8) 名東 消費者行動の研究 東洋経済新聞社
1974 pp 30~34
- (9) 鮑戸 弘 前掲(2) pp 18~20
- (10) 高橋 和敏 前掲(4)
- (11) 鮑戸 弘 前掲 pp261~262
- (12) 高橋 和敏 前掲(3)
- (13) 高橋 和敏 前掲(3)
- (14) 博報堂生活総合研究所 前掲 pp 88~89

〔参考文献〕

- 1) 水島他 イメージの基礎心理学 誠信書房 1983. 6
- 2) 塩田 静雄 消費の社会学 文真書房 1976. 4
- 3) 鈴木 秀雄 ゲームに対するイメージの比較考察
第2回レクリエーション学会発表抄録 1972 p 30
- 4) 金崎 良三 レクリエーションイメージの構造について。第5回レクリエーション学会発表抄録
1975 p 15